

万葉ゆかりの地
黒船の見張り番所の跡
元番所お台場の跡

番所庭園



一、万葉時代神龜元年（七二四年）十月に、聖武天皇が大和の都から、お供の公家、宮廷人達と、和歌の浦に行幸されました折、藤原御がここ番所庭園の北側に広がる海「雑賀の浦」の漁火を見て、詠まれたと言われている次の歌は、あまりにも有名です。

紀の国の雑賀の浦に出で見れば
海女の燈火波の間ゆ見ゆ

藤原御（巻七―一九四）

昭和五二年に、宇治田省三和歌山市長は、犬養孝大阪大学名誉教授に、市域を詠んだ万葉歌十首と、その故地十箇所を選んで頂き、そこにその歌板と歌碑を建立しました。「雑賀の浦」の歌板と歌碑は、犬養先生が近辺各所歩かれて決められた園内に今も大切に管理されています。

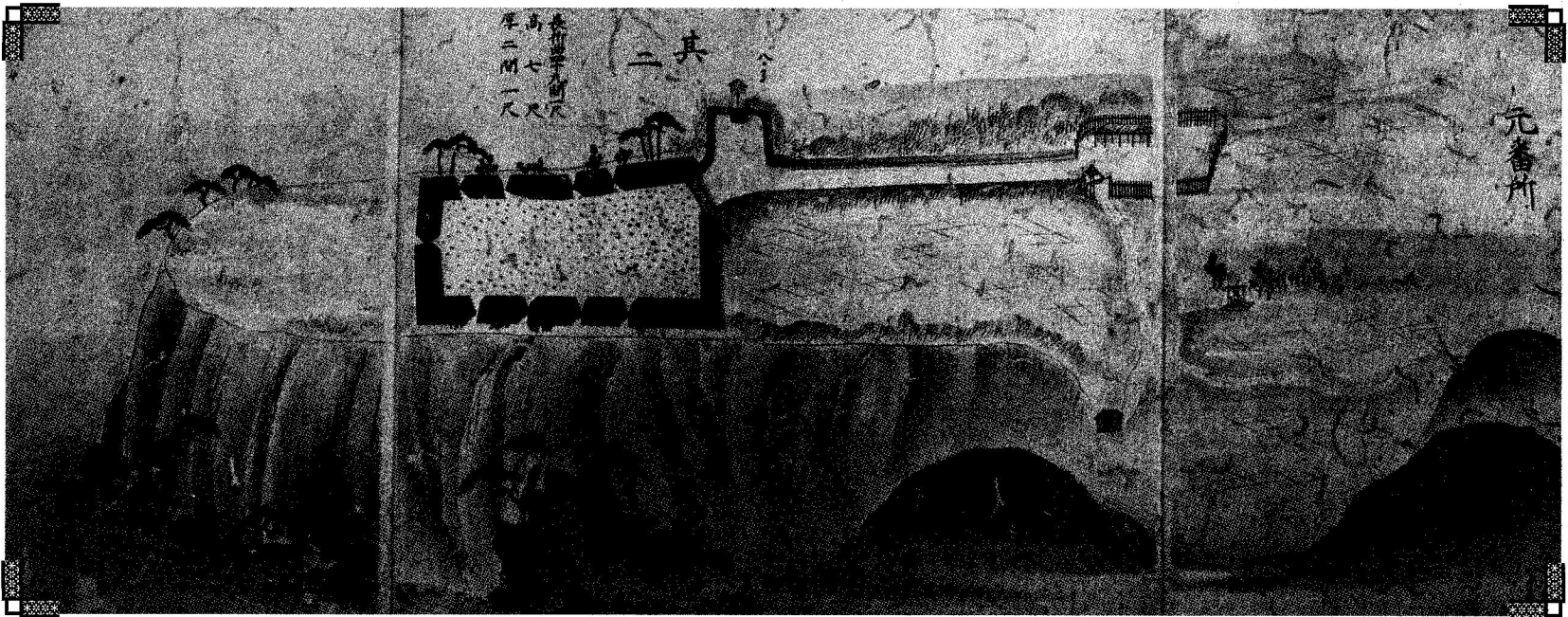
二、番所庭園のあるここは、地図にも出ている様に「番所の鼻」と言い、平坦で海に長く突き出た地形で、紀州藩は海の防備見張りのため遠見番所を設けました。藩領の長い海岸線十数ヶ所に番所がありました。ここはその中でも和歌山城に最も近い番所として、狼煙場と共に重要な所でした。其の後、遠見番所は鷹の巣山頂へ移転したので、ここは「元番所」とも呼ばれています。

三、米国ペリーの来航（嘉永六年一八五三年）を機に、紀州藩も本格的に海防に取り組み始めました。翌年安政元年（一八五四年）に家老三浦長門守御持場「元番所お台場」が当庭園内大芝生の辺りに構築されました。紀州藩から出された異船記（和歌山県立図書館蔵書）には、この「元番所お台場」全体の鳥瞰絵図や大砲・鉄砲・人員の配置などが、詳細に記載されています。

ここ番所庭園は、和歌山市万葉めぐりコースです。また瀬戸内海国立公園特別地区にも指定された国の代表的景勝地です。特に同国立公園中の景勝地五十ヶ所にも選ばれています。また、珍しい紀州青石（綿泥片岩）の海岸美も、ごゆっくりと、楽しんでください。



ご注意 当庭園は海に取り囲まれた地形のため、安全には充分御注意ください。特に、お子様から目を離されませんように、ご注意ください。



異船記(卷一、卷八)について

異船記は、和歌山県立図書館に蔵書されています。これは安政元年から同三年(一八五四年〜一八五六年)にかけて、紀州藩から出された全八巻本で、著者は藩校学習館の教授で儒者の岩橋藤蔵と、紀州藩士で海士御代官見習いの小島備源及び紀州藩の絵師野際蔡真の三人です。

ロシアのプチャーチン提督は、ディアナ号一隻で、日本に再来し、日口間の条約締結を実現させるため、前年の長崎での幕府との直接交渉の失敗に懲りて、今回は朝廷や幕府を威嚇することで交渉を進めようと、安政元年(一八五四年)九月一五日に紀伊水道に突如現れた。紀州藩領海を、いつたりきたりして威嚇しつつ、ゆっくりと北上を続け、九月一七日に加太友ヶ島より大阪湾に入り、天保山沖に碇泊した。幕府は、下田で交渉する旨を返事したので、彼は下田に行くため大阪を出航し、十月四日に加太浦に寄港した。此所で下田奉行宛の通行証を受け取り、翌五日夕方下田に向け出航した。

この加太浦寄港時に著者の三人は、艦に赴いて応接し、また艦内の見学もして、日口両国間の技術格差の大きさに驚いた。

紀州藩では、安政元年正月には既に海防計画を策定し終わっていたので、ディアナ号の突然の出現と軍事力の格差に驚いた紀州藩は、急遽その海防計画の実施に踏み切った。六千人の藩士と四千人の地域住民を動員して、加太友ヶ島と下津大崎との間のお台場の構築と、そこへの大砲・鉄砲・要員の配備を強行実施した。

異船記は、以上の状況を詳細に具体的に絵図入りで記録した貴重な幕末の紀州藩海防歴史書です。

安政元年(一八五四年)、現在の番所庭園内の大芝生の所に構築された「元番所お台場」の全体鳥瞰絵図は巻八に(上に複写させて頂いた写真を示す)、大砲・鉄砲・要員の配備状況は巻一に詳記(上記表に示す)されています。

(ご指導頂いた和歌山市立博物館学芸員武内善信先生に、お礼申し上げます)

雄略崎カバニ元番所から 和歌浦中道までの区域	区域責任者 御家老 三浦長門守	元番所お台場所属の砲	上記砲の打人
区域海岸防衛掛員	海岸防衛掛藩士 総勢八五二人 (その外に打人数目心)	①一貫目砲……一挺 ②一貫目木砲……一挺 ③三百目砲……一挺 ④四百目砲……五挺 ⑤榴留二十目砲……一挺 ⑥クク六匁砲……一挺 ⑦十匁砲……二十挺	御鉄砲奉行 佐々木浦右衛門弟子 御家老 三浦長門守手人

(實目三七五キログラム)
(異船記巻一から)
目々三七七キログラム